

今月の谷口雅春先生のお言葉

子供の善なる本質を観て信じること

子供は神が守って^{たま}い給うのである

多くの母親は子供のことをあまりに取越^{とりこ}苦勞^{くろう}するため
に、却^{かえ}って子供に悪念^{あくしねん}を放送して子供の健康や運命を
害している。或^ある母親は一瞬間でも自分の眼^めの前^{まへ}にいな
いと心配でたまらないのである。彼は自分の想像の中^{うち}
で、躓^{つまず}いて転んでいる自分の子供の姿を思い浮^{うか}べる。自
動車にひかれて死にかかっている自分の子供の姿を思い
浮^{うか}べる。水に陥^{おぼ}って溺^{おぼ}れかかっている自分の子供の姿を
思い浮^{うか}べる。世の母親よ、何故^{なぜ}あなたはこの反対をして

はいけないのか。こんな取越苦勞が起るのは、子供を神
の子だと思わないで人間の子だと思うからである。神の
子は神が育て、人間の子は人間が育てる。人間の子だと
思うものは終世^{しゅうせい}、取越苦勞をして育てねばならぬ。子
供を神の子だと思うものは、子供を尊敬して出来るだけ
その世話をさせては頂^{たま}くが、神が守^{まも}って^{たま}い給^{たま}うと信ずる
が故^{ゆえ}に取越苦勞は必要はないのである。

(新編『生命の真相』第22巻2頁)

まず親の心と態度から

子供は最も多く母親のなすこと、いうことの影響を受けるのでありますから、母親の性質とか心持、態度というものが子供に最も多く現れて来るのであります。でありますから、皆さんがお子さんにもっとよい性質がほしいと思われたら、まず自らを省みて自分がよくなって頂くことが肝腎なのであります。

子供というものは、「お前は悪い悪い」と叱つてもなかなかよくなるものではありません。常に善い方面を見るようにして、悪は見ずに、子供の完全円満な実相を見るようにして、それを賞め言葉で誘導していれば必ずよくなって来るのであります。(中略) 命令や吩咐よりも、行いで手本を示されますと、子供は直ぐその真似をするものでありますから、常に子供によい実例を示し、常によき行為の模範になることが大切であります。

(新編『生命の真相』第22巻71〜72頁)

子供を信じるほめ言葉が子供を善くする

親の心が子に映るのが実際の事実としたならば、親達

はもう少し考え直さねばならないだろうと思うのであります。子を教育する前に先ず親が自らを教育しなければならぬと考えざるを得ないのであります。

子の成績が悪いというのも、親、或は学校の先生が悪くしている場合が多いのであります。千葉県の白里村に小倉久之丞さんという小学校の先生がおります。(中略) 或日、他の教室の授業時間を参観しておられましたら、その組の受持の女の先生が一人の子供をつかまえて大変怒っておられたのです。「お前位出来の悪い子はない。実にお前はなまけものだ。先生の教を少しも注意してきかない」といつてひどく叱られていたのであります。やがてその時間がすんでから、徐ろに小倉久之丞先生がその子に近付いて「あなたは好い子だねえ」と静かにお褒めになったそうであります。「あなたはよく勉強するね、きつとよく出来る子になるよ！」と柔しい、しかし、子供の善さを固く信ずるような語調で、簡単にほめられたのであります。それ以後その子の性質が一変して、大変よく出来るようになったのであります。その事実を見て、職員会議の時にその女の先生が起ち上つ

て告白されたそうでもあります。「私のこれ迄の子供の教え方は間違っていました」といって皆の前で懺悔されたということでありました。単にそれだけの優しい、信じてくれる賞め言葉が、子供を善くするのであります。「お前はほんによい子だよ」という、それだけの言葉にすら子供を生かす力があります。それに先生がヒステリーを起して、「こんな悪い子はありやしない」なんて怒れば、子供は正直なもので、「先生は偉い」と信じきっているのですから、その偉いと信じている先生が、「自分を世の中で一番悪い子だというんだからほんとにそうかも知れない」と、子供がそう思ってしまったが最後、勉強に興味がなくなり、先生に嫌われたらと思って、教室にいても面白くなく成績もずんずん悪くなってゆくのであります。ちょっととした言葉で子供が良くもなり、悪くもなる、通信簿に書いてある子供の成績は、実は親の成績表であり先生の成績表だといって好い位であります。（新編『生命の真相』第22巻20～23頁）

子供の奥にある「神の生命」を観る

人を見るのにその外見をもってしてはならない。人間の真相を見ると云うのは、人間の肉体や衣服は仮りの相であって、「人そのもの」ではないと云うことを知り、その奥に宿っているところの「神の生命」（仏教的に謂えば「仏性」）を観ると云うことなのである。何人も神の自己顕現として、自己の内に「神」を蔵しているのである。これこそが「真の人間」であるのである。そしてその「内部の自己」が「神」であることを自覚し、それを尊敬し、その如く生きようと努力するとき、自分の性格も環境も健康も改まりはじめるのである。そして他の人の「内部の自己」が矢張り「神」であり、完全であることを心で一心に観て、それを尊敬し合掌礼拝するようになるとき、その「他の人」が礼拝されるに相応わしい立派な人間となって顕れてくる。（新装新版『真理』第2巻142頁）